

Title	多様な授業形態を支える情報サービスを目指して
Author(s)	竹村, 治雄
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2018, 18, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70424
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

巻 頭 言

多様な授業形態を支える情報サービスを目指して

サイバーメディアセンター
情報メディア教育研究部門
教授 竹村 治雄

サイバーメディアセンターは、その前身の一つである情報処理教育センターのミッションとして情報教育システムの運用をし、また基礎工学部情報科学科と共に共通教育の情報処理教育科目の責任部局としての役割を担っています。また、教育情報化の進展に合わせて、2006年には学務情報システム KOAN と連携した授業支援システム WebCT を導入し、全学サービスを行ってきました。2012年からは後継システムである Blackboard Learn 9.1 を大阪大学 CLE (Collaboration and Learning Environment) として導入し、現在に至っています。つまり、全学で利用できる授業支援システムが導入されてから 10 年以上が経過している状況ですが、まだその活用については道半ばと言わざるを得ない状況です。

2016 年からは講義映像収録配信システムを運用し、全学教育推進機構の一部教室での講義映像の収録と受講生への配信を行なっています。これらのサービスの知名度は、学生には高く、教員には低いのが今号の授業支援システムに関するアンケートをご覧いただいてもご理解いただけると思います。この巻頭言では、このような状況を踏まえて、平成 31 年度のカリキュラム改革で共通教育に e-Learning による授業科目が本格導入することを見すえた、今後の多様授業形態を支える情報サービスのあり方について概観してみたいと思います。

私たちのように、情報サービスを提供する部局にとっては、24 時間安定したサービスを利用者に提供することは一つの重要な使命です。したがって、様々な情報サービスを立ち上げる場合には、その円滑な

導入と安定した運用は欠かせません。しかしながら、利用者にとっては、情報サービスは空気のような存在で、いつでも使えることが当然で、その上にさらに様々な利用者サービスを求められていることは間違いないはずです。現状では、授業支援システム CLE は学内に設置されたサーバー上で稼働しており、法定電気設備の点検による停電や、セキュリティパッチの適用など様々な理由でサービスを都度停止しなければならず、利用者にはご不便をかけています。学内でこのようなサービスを運用する以上、これは避けて通ることのできない問題ですが、今後システム自体を学外のクラウドに移行することで、継続したサービスの提供を目指しています。

授業支援システム CLE は、授業を支援する様々な機能が用意された WEB サービスですが、逆に機能が多すぎて利用しづらい、同じような機能を提供する複数のツールがあり、どれを使って良いのかわからない、などのご指摘もいただいています。様々な先生方のご要望に応えるために、多くの機能を提供することは間違いではありませんが、そのことが初めて利用される先生方にはかえって障壁となっているのかもしれません。そのような状況を緩和するために、毎年 KOAN に登録されている授業科目用に利用するコーステンプレートのデザインを見直しています。例えば、一昨年は CLE を教材配布に利用することが多いと判断して、コースコンテンツのページが講義（コース）を開いた際に最初に表示されるようにカスタマイズしています。このほかにも先生方からいただいた要望は可能な限り開発元への大阪大学の要望として伝えていきます。

さらに、2013年に発足した教育学習支援センター（現全学教育推進機構教育学習支援部）とも協力して授業支援システムの効果的な活用方法の講習会を適宜開催しています。従来の講習会が、授業支援システムの持つ機能の紹介が中心となっていたのに対して、現在の講習会は、授業支援システムを用いた講義の組み立て方とそれに基づく便利な機能を紹介する、より先生方になじみやすい講習会となるよう心がけています。ぜひ一度ご参加下さい。

この、授業支援システムですが、普通は講義資料の配布と、レポートの提出に多く使われていると利用履歴からも推察されます。授業支援システムを用いてレポート提出を行う場合、紙のレポート提出と比較して、様々なメリットがあります。レポートは全てCLE上で管理されますので、紙のレポートと比較して物理的な場所を必要としません。また、PDFだけでなく、MS-Wordで提出されたファイルもCLEの画面上で内容をチェックすることができます。そのため、個々のレポートを印刷することなく採点することができます。また、学生は、インターネットに接続されたパソコンさえあればどこからでもレポートの提出ができます。さらに、CLEには2種類の剽窃チェックツールが用意されていて、これを用いることで、他の学生からやインターネット上からの剽窃をチェックすることができます。

大阪大学では、大半の授業がいわゆる「対面授業」として教室で行われています。このことが、授業支援システムの利用が進まないことと関連していると思われませんが、実際には大学にはより柔軟な授業形態がすでに認められているのをご存知でしょうか？従来はe-learningを用いて教育を行うことは通信制の大学にだけ認められていたのですが、現在では大学設置基準によって、次のように定められています。「授業は、講義、演習、実験、実習若しくは実技のいずれかにより又はこれらの併用により行うものとする。2.大学は、文部科学大臣が別に定めるところにより、前項の授業を、多様なメディアを高度に利用して、当該授業を行う教室等以外の場所で履修させることができる。」（大学設置基準第25条前半）この、多様なメディアを高度に利用して、当該授業

を行う教室以外の場所で履修させる授業には、同時中継されるような遠隔授業とe-Learningを用いたオンライン授業が該当することが、文部科学大臣告示で定められています。（細かい条件がありますがここでは省略します。）この定めにより、大阪大学でもe-learningを用いたオンライン授業を実施することが可能です。現在計画されている平成31年度からのカリキュラム改革でも、この基準に基づいて情報リテラシーの初年次教育を、対面授業とオンライン授業の組み合わせで行うことを計画しています。具体的には、従来15週を要していた授業を、対面授業8回、オンライン授業7回とし、毎週対面授業とオンライン授業を実施することで半分の8週すなわち1タームで終わることを計画しています。

また、通常に対面授業の講義科目でも、一部講義をオンライン授業とすることで、講義日程の柔軟な配置が可能となります。例えば、学会出張などの理由で休講とした場合の補講をオンライン授業として行えば、補講のための日程や教室の調整等が不要となります。そもそも、出張と重なった授業そのものをオンライン授業とすれば、休講する必要がないこととなります。

このように、授業支援システムを効果的に利用することで様々な授業形態が可能となります。オンライン授業を実施しなくても、講義内容を事前に学生に公開することで、反転授業を実施することができます。オンラインクイズ機能を用いることで、学生の講義内容に対する理解度を事前にチェックしておいて教室での講義に臨むこともできます。

今までは、前述のようなCLEの多様な利用方法についての情報発信が必ずしも十分ではありませんでしたが、今後は平成31年度からのカリキュラム改革に向けて様々な活用事例を全学に発信するようにいたしますので、授業支援システムをはじめとする様々な教育情報化のための情報サービスをご活用ください。これらのサービスの利用は教育の質の保証および省力化にも関連するものです。今後ともサイバーメディアセンターの提供するサービスに対して、忌憚なきご意見をお寄せください。